



自転車社会の環境改善を目指して No.54

## バスと自転車の共存プロジェクト ～自転車利用者向け死角体験会の取り組みについて～

文

企画集団らくもび

高島 亮太

自転車活用推進研究会 事務局：  
〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-3-1 自転車総合ビル 4 階  
TEL 090-5301-3207 FAX 03-6409-6803  
URL <http://www.cyclists.jp/>



### 「らくもび」の考え方

企画集団らくもびは、「楽(らく)で快適で判りやすい移動＝モビリティ(もび)環境の実現」をミッションとし、交通に関心を持ち思いを同じくしながら多様な立場で活動する人材が集う全国ネットワークです。2010年開催の全国バスマップサミット東京大会の実行委員会を母体とし、2013年に団体として設立。市民・事業者・自治体とコラボレーションしながら、さまざまな企画提案・プランニング・コンサルティングやハード面の取り組み支援を実践してきました。個別の交通手段としての利便性ばかりではなく、交通事業者の経営、行政のまちづくりや安全の面も含めた多角的な課題解決やプラスの効果をもたらすため、多様な主体が協力し合い、「接点」を生み出しながら、新たなモビリティの実現を目指し活動しています。

### 「乗り方教室」を通して 見えてきたこと

当団体では設立当初より、気軽に快適な公共交通利用をサポートするため、さまざまな交通事業者や地域のイベント等で、「バスの乗り方教室(親子向け・ベビーカー向け)」を提案し実施してきました。このなかで行ったのが、「降車客とバスの

左側をすり抜けてくる自転車の接触実演」です。この取り組みを通じて、バスの安全を自転車側からも同時に捉える視点に気がきました。そこには、バス停にバスが停車している時に「どこをどう走って良いのか分からない」という自転車側の課題がありました。

バス利用者も曜日や天候などによって、同時に自転車利用者でもあり得ます。それぞれの交通手段(バス・鉄道・自転車・自動車など)を個別に考えるだけでなく、モビリティ全体を捉えて啓発活動を行うことの大切さを再認識しました。

### バスと自転車利用者の関係性

そして次のステップとして、「バスの乗り方」と「自転車ルール」の教室を同時に行うことを考えました。筆者自身とメンバーの1人にも都内の路線バス運転の経験があり、事故防止(接触事故や急ブレーキによる車内人身事故リスク)の重要性や「自転車と共存」しながらの運転にいかにか神経を使うかを体験的に知っていました。同時に自転車利用者としては、バスとの接近時の危険(幅寄せや巻き込みリスク)を感じており、その啓発活動の重要性を認識していました。そこ

には、近年の自転車利用の増加と共に、その新たな対策が求められている背景もありました。

我が国では1970年前後、自転車の安全確保のため歩道走行を促す政策がとられました。これには死亡事故の削減など一定の効果はあったものの、自転車は交通ルールを守るべき「車両」であるという意識が希薄になり、近年、歩行者との接触などが新たな問題となっています。そこで2007年に出された「自転車安全利用五則」では、「自転車は車道が原則、歩道は例外」が打ち出され、2012年の「安全で快適な自転車通行空間整備ガイドライン」では、自転車の通行空間の車道への整備が進められるなど、自転車を取り巻く環境は大きく変化してきています。しかし、長年の慣習もあり、自転車・自動車双



バス運転席に座って死角を体験

方の認識やマナーが追い付いていないのが現状といえます。

特に路線バスについては、車体の大きさや発進停止の頻度から自転車との交錯機会が多いなか、お互いに「遅い・危ない・邪魔」といったネガティブな印象が先に立ち、安全面の課題は深刻となっています。本来、双方が同じ道路を走る車両であり、安全な通行をするため譲り合うことが必要です。これは同じ道路空間での共存を図る考え方、「Share the Road」であり、その意識の周知・徹底が求められています。そのため、バス・自転車双方の挙動や特性を具体的に知り、相互理解を深めることを目的に、「バスと自転車の共存プロジェクト」を立ち上げました。その第一歩としての企画が「死角体験会」でした。

## バスと自転車のコラボ企画 「死角体験会」の試み

死角体験会は、まずは、バスイベント会場に自転車を持ち込んで実施しました。バス運転手からの視点、特に「死角」に焦点をあて、2016年3月「江ノ電バスファミリーフェスタ」、5月「バスとタクシーのひろばin小平」で実施し、好評を得ました。

次にチャレンジしたのが、自転車イベント会場にバスを持ち込むという試みです。自転車のマナーアップ活動に取り組む団体、(一社)グッド・チャリズム宣言プロジェクトとの共同により2016年9月、岩手県陸前高田市での「ツール・ド・三陸」において大型ダンプとバスの死角比較体験会を、続いて12月には埼玉県戸田市での「スポーツバイクデモ」ではトラックの死角体験会を実施しまし



自転車に見立て原付バイクを配置。この場所は死角で、運転手からは見えない



地域を走るバス事業者との連携が欠かせない

た。また同月、東京都調布市の味の素スタジアムで開催された「東京ワンダーレース」において、地域を走る京王バスとの共同でも実現することができました。

## バス運転手からの視点を体験

死角体験会では、実際にバス運転席からの目線と自転車での死角位置を体験して死角について知ってもらいます。例えば、バス運転手は発進時には複数のミラーで安全を確認し、ほぼ同時に多くの動作(ドア閉め操作、乗客の着席確認、発車合図出し、車内放送、発進操作など)をし、細心の注意を払っています。このため、自転車にとって「バスが急に出て来た」と感じる時には、自転車が見えない死角にいる可能性があります。そして、バスには高齢者から子どもまで満員で約70人もの乗客がおり、自転車が死角から急に現れることで乗客が負傷等する車内人身事故が危惧されています。これらのことをサイクリストでもあるスタッフを中心として当事者ならではの視点を活かしてお伝えしています。

参加者からは「こんなに近くにいるのに運転手から見えていないのか」「過去の危ない場面も、死角にいて見えていなかったのかも」という発見の声が多くあります。一方、

バス会社の方からは、「(自転車利用者から)バス運転手は広い範囲が見えていると思われることを知った」とのことで、相互理解を深める機会となっています。

## 今後の展開について

自転車へのアプローチとしては、さらに多くの日常的な自転車利用者に向けた啓発が必要と考えています。また、バス事業者に対しても自転車の挙動や特性に関する理解を深めてもらう機会を増やし、活動を広げていきます。

2017年施行予定の「自転車活用推進法」では、自転車利用者の安全啓発と共に、自転車による交通の役割の拡大として「公共交通機関との連携」も謳われています。つまりは、自転車と公共交通機関相互の理解を深め、共存を図ることが求められているといえます。

当団体としては、今後ともバスと自転車をつなぎながら、ソフト面、ハード面の提案や啓発活動を続けていきます。この「バスと自転車の共存プロジェクト」を通じ、ひいては自転車とその他の自動車や公共交通機関も含めた新たなモビリティ、多様な交通手段を連動させた「らくもび」の実現につなげていきたいと考えています。

PP